

セクシュアリティと欲望の真理

フーコーと性解放運動

慎改康之

『現代思想』第 31 巻第 16 号掲載論文

これは MicrosoftWord によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。

『現代思想』に掲載されたテキストとは多少異なる部分があります。

## セクシュアリティと欲望の真理 フーコーと性解放運動

慎改康之

『聖フーコー』の著者デイヴィッド・M・ハルプリンによると、「現代のエイズ・アクティヴィストたち」にとって、ミシェル・フーコーは、「かつての新左翼の学生運動家としてのノーマン・O・ブラウンやハーバート・マルクーゼにあたる」という。すなわち、彼らは『性の歴史』の第一巻『知への意志』を「その政治運動を理論武装する際の最も重要な知的源泉」としており、セクシュアリティをめぐる政治的運動の「聖人」としてフーコーを崇めている、ということである<sup>1</sup>。そして自ら「ゲイ・スタディーズ」を実践するハルプリン自身も、そうした崇拜を隠そうとはしない。「ゲイ男性として」いかに語ればよいかということをつーコーとのあいだに共有する問題としてとらえつつ、彼は自らの書物をこの「聖人」に捧げるのである<sup>2</sup>。

しかし、性解放運動の側のこうした熱狂に対し、フーコー自身は、そこから常に一定の距離を保っているように思われる。というのも、『ミシェル・フーコー思考集成』に収められている数々の対談のなかで、彼は、一方では解放運動の有効性を認めながらも、他方では、自分は一度もそうした運動に加わったことがないということ、また、「解放」という主題にはずっと懐疑的であったということを明言しているからだ<sup>3</sup>。そして彼によれば、解放運動が性に関する諸権利の獲得をもたらしたのは事実であるとしても、それではまだ十分でなく、そこからさらに進んで「生の新しい形式」を創造する必要があるという<sup>4</sup>。同性愛について言えば、必要なのは、自分が同性愛者であることを発見しようとしたりそれを承認しようとしたりすることではなく、「懸命に同性愛者になろうとする」ことなのだ、と<sup>5</sup>。

もちろん、ハルプリンも、解放運動に対するこのようなフーコーの消極的態度を知らぬわけではない。ただし彼は、それを考慮に入れた上で、あくまでも「フーコー効果」の研究に専念しようとする。すなわち、フーコーの思考そのものを解説したり敷衍したりしようとするのではなく、とりわけ政治的運動のなかに身を置く人々がフーコーの仕事に対してどのように「応答したか」を探ってみよう、というのが、『聖フーコー』という書物の企図なのだ。そこで我々は、こうした「効果」の探求にかえて、フーコーのテキストそのものに焦点を定めた考察をここに提示してみたい。フーコーと解放運動との関係について、著作や対談のなかで実際に語られていることのレベルに身を置きながら検討を進めてみたいと思う。フーコーは解放運動の有効性とその限界をどこに見出しているのか。また、新たな生の様式を発明すること、「同性愛者になる」こととは、いったいどういうことなの

か。これらの問いについて、主に『知への意志』および『思考集成』に収められたテキスト群に問いかけつつこれから考察を試みることにしよう。

## 戦術的逆転

「フーコーにとって、性の抑圧と性の解放とは同じことだ・・・」『性の歴史』の第一巻『知への意志』をめぐるこの種の批判に対して、フーコーは、一九七七年の日付を持つ対談のなかで、自分は決してそのようなことを言っておらず、それは「誤解」にすぎない、と断言している。セクシュアリティがいかに抑圧されてきたかということよりもむしろ、性に関する言説がいかに煽動されてきたかということに注目するからといって、自分は決して、「道徳の番人の言説と性の解放の言説とのあいだに差異がない」などと言ったことはない、と。実際、彼はそこで、同性愛解放の運動およびフェミニズム運動に言及しつつ、それらの運動が政治的に果たした役割を評価している<sup>6</sup>。そして、解放運動の意義に関するフーコーのこうした肯定的見解は、その後も変わることはないだろう。というのも、一九八四年のある対談にもやはり、次のような言明が見出されることになるからだ。仮に解放運動の実践が、性に関する市民権を要求するレベル、性的寛容を要求するレベルに留まったとしても、それはそれで支持されるべきである。というのも、「個人にとって自分の性を選ぶ可能性 — そして権利 — を持つことは重要である」からであり、その意味で、一九七〇年代初めの解放のプロセスは実りあるものであった、と<sup>7</sup>。このように、セクシュアリティをめぐる権力関係の歴史研究を試みた七〇年代後半から、その研究に変更が生じて「主体化」の軸への移行が起こる最晩年に至るまで、フーコーは、性解放運動に対する一定の支持を表明しているのである。

なるほど、『知への意志』には、フーコーが権力に抗する政治的運動に対して否定的であるという解釈を生じさせようような記述が少なからず含まれている。権力関係とは、支配と被支配、抑圧と被抑圧との対立としてではなく、「それらが行使される領域に内在的で、かつそれらの組織化の構成要素であるような、そうした無数の力関係」として理解すべきものであるということ、そしてその限りにおいて、「権力はいたるところにある」と言いうること<sup>8</sup>。さらには、そのようなものとしての権力に対して、「抵抗は決してその外側に位置するものではない」ということ<sup>9</sup>。こうした記述には、我々が常にすでに権力に囚われとなっており、「解放」の可能性などそこには残されていない、ということが語られているように思われもしよう。しかしやはり前出の二つの対談においてフーコーは、実際には我々は「囚われとなっている」のではなく「戦略的状況のなかにある」のであり、権力関係の「外」に身を置くことは不可能であるとしても、そうした状況を変えることは可能なのだということを、性解放運動の場合について具体的に示そうとする<sup>10</sup>。彼によれば、「同性愛」をめぐる医学的な分析と介入を支えとする「戦略的状況」が確立するのは、一八七〇年代以降のことであるという。すなわち、それ以来、「同性愛者」たちが、性的本能を病

んだ者として、精神病院に収容されたり治療を施されたりするようになる、ということである。しかし、まさしくそうした状況のなかで、次のような「挑戦というかたちでの反応」が出現することになる。「仮に、私たちが、生まれながらにしてあなたがたが言うとおりの者であるとしよう。それを病と呼ぼうが倒錯と呼ぼうが何でもかまわない。私たちがそういう者であると言うなら、そうであることにしよう、そして、あなた方が私たちのことを知りたいと言うのなら、私たち自身の方があなた方よりもよりよく、それについて語ってあげよう<sup>11</sup>。」あるいは、次のような異議申し立てが生じることにもなる。「私たちがもし病気であるとするなら、なぜ私たちを断罪し、蔑視するのか<sup>12</sup>。」つまり、自らが身を置く戦略的状况を変革するために、「抑圧」の道具として機能している医学的真理の言説をいわば逆手に取り、抵抗の手段として機能させることが可能であるということ、そして解放運動において実際にそのような抵抗が行われたということ、フーコーは示そうとするのだ。ところで、こうした補足的説明は、『知への意志』の多少とも注意深い読者にとっては実は無用のものである。というのも、この一九七六年の著作のなかでフーコーはすでに、「言説の戦術的多義性」という問題との関連において、戦略的な場の変容の可能性を語っているからだ。

「言説の戦術的多義性」ということで『知への意志』が言おうとしているのは、権力関係のなかで現れる一つの言説を、「その戦術的な機能が一樣でも一定でもないものとして構想しなければならない」ということである。すなわち、一方に権力の言説があり他方にそれに対抗するもう一つ別の言説があるのではなく、同じ一つの戦略の内部において相異なり矛盾する言説がありうるし、または、相対立する戦略のなかで姿を変えることなく循環する言説もありうる、ということだ。権力の道具として機能している言説が、同時に、正反対の戦略のための出発点として、「権力を内側から蝕み、危険に晒し、脆弱化し、その行く手を妨げることを可能にする」ものとしても役立つということ。そしてこのことを実際に体現しているものとして挙げられるのが、性解放の運動である。「十九世紀の精神医学、法解釈、そして文学においても、一連の言説が、同性愛、性倒錯、少年愛、「心的両性具有」といったさまざまな種ならびに亜種に関して出現したことは、確実にこの「倒錯」の領域における社会的管理の大きな前進を可能にした。しかしそれはまた、「逆向きの」言説の成立をも可能にすることになった。つまり同性愛が自分自身について語り始め、その正当性あるいは「自然性」を主張し始めたということであり、しかもそこではしばしば、医学が同性愛を貶めるその用語、その範疇が用いられたのである<sup>13</sup>。」権力を遍在する力関係としてとらえる限りにおいて、解放運動は確かに、権力関係の外への脱出を可能にするものではない。しかしそれは、抑圧ないし管理のために用いられる言説を「逆向き」に使用するというやり方によって、自らの置かれている戦略的状况を転倒させることができる。フーコーにおいて解放運動はこのように、一つの戦略をいわば内側から引き裂いてそれを機能不全に追い込むことを目指すものとしてとらえられているのである。

とはいえ、このようなものとしての性解放運動の有効性を認めた後、フーコーはただち

に、そこにとどまっていたはならない、と付言する。すなわち、自らに課されたセクシュアリティを自ら肯定してみせるという「戦術的逆転」に加えて、そこから「さらに一步前進すること」<sup>14</sup>、そして「別の肯定へと進むこと」<sup>15</sup>が必要である、と言うのである。それでは、その一步とは、どのようなものであろうか。どのような肯定が、さらに必要とされるのだろうか。したがって今度は、解放運動が超え出べき限界とはいったいいかなるものであるかということについて考察しなければならない。

## セクシュアリティの産出

前に挙げたものとは別の一九八四年の対談において、フーコーは、一般に「解放」という主題を扱う際には十分な用心が必要であるということを語っている。警戒すべきは、「一つの本性、一つの人間の根底のようなものがあって、それが、いくつかの歴史的、経済的、社会的プロセスの後に、抑圧のメカニズムのなかで、そのメカニズムによって、隠蔽され、疎外され、もしくは閉じ込められてきたのだ、という考え」である<sup>16</sup>。すなわち、「抑圧」された「本性」の「解放」を語る前に、そうした解放すべき本性なるものが果たして本当に存在するのかどうかと問う必要があるということだ。性解放運動について言えば、確かに、セクシュアリティという戦術的要素を利用しつつ自らが置かれている戦略的状况を動揺させることができましょう。しかし、そこではなお、解放すべき「本性」としてのセクシュアリティが、いわば自明なものとして前提されたままになっているのではあるまいか。ところで、セクシュアリティというこの概念の見かけの自明性を問題化すること、これこそまさしく、『性の歴史』の企図そのものであった<sup>17</sup>。そして、そのようなものとしてのセクシュアリティを権力という文脈のなかで考察しようと試みたのが、第一巻の『知への意志』に他ならない。そこにおいて描き出されるのは、権力によって抑圧されてきたものとしてのセクシュアリティではなく、むしろ、権力によって「産出」されたものとしてのセクシュアリティである。

「同性愛」という一つの「倒錯的」セクシュアリティの確立について、『知への意志』は次のように語っている。かつての「男色」は、世俗的ないし宗教的秩序における違法性としてとらえられていた。つまりそれは、法的な禁止に対する侵犯行為であり、「法に反するもの」の極端なかたちとしてとらえられていたにすぎなかった。これに対し、十九世紀以降の「同性愛者」は、ホモ・セクシュアリティという「特異な一つの本性」を持つ者として現れる。すなわち、法に反する行動を取る主体のうちに、主体をそうした行動へ駆り立てる原動力のようなものが、主体に固有に帰属するものとして想定されるようになるということである。ある特定の性的行動をとる者ではなく、その「本性において」同性愛的な欲望を持つ者として、「同性愛者」が登場するということ<sup>18</sup>。それが抑圧の対象となるにせよ、逆に抑圧に対する反撃の拠点となるにせよ、「性倒錯」についてまず注目すべきなのは、それが「特異な本性」として確立されることになったというこの出来事である、というわ

けだ<sup>19</sup>。

それでは、そうした「性倒錯」の確立は、いったいどのようにしてなされたのか。フーコーによれば、それは、権力のメカニズムの歴史的変容によるものであるという。彼は、医学、精神医学、心理学における「性倒錯」の確立のなかに、個人に関する知を自らが機能するための特権的な道具として利用するような権力形式の登場を見る<sup>20</sup>。この新たな権力は、性の真理としてのセクシュアリティを、「身体の内部に侵入させ、行動の下にしひこませ、分類と理解可能性の原理とし、無秩序の存在理由であり自然本性にもとづく秩序であるものとして構成する」。つまり、個人を種別化し、個人に対して介入する権力の戦略のなかで、個人の内部に、本性としてのセクシュアリティが、知るべきもの、その真理を手に入れるべきものとして組み込まれるようになるということだ。これによって、規範から逸脱した性行為に身を委ねる者たちが、「倒錯性」という自らに固有の真理を持つ一つの「種族」として構成され、そうした者に対する治療、差別、排除といった措置に根拠が与えられるようになるのである<sup>21</sup>。このように、個人に対してその個別性の刻印を押しつつ服従を強制するという権力のメカニズムを、フーコーは、*sujet* という語の二重の意味をふまえながら、「隷属化」*assujettissement* と呼ぶ。すなわちそれは、個人を、自己のアイデンティティに隷属する主体 *sujet* であると同時に他者に隷属する臣下 *sujet* でもあるようなものとして構成するメカニズムのことだ<sup>22</sup>。個人を一つの真理、一つの「魂」につなぎとめつつ<sup>23</sup>、それによって個人の身体およびその行動を攻囲することを目指す権力。要するに、『知への意志』は、セクシュアリティを、このような「隷属化」の権力の効果であると同時に道具であるものとして描き出そうとしているのである。

したがって、性について解放を語る際には、最大限の警戒が必要である。確かに、自らに課されたセクシュアリティを引き受けつつ、それを抵抗の拠点として利用することは、戦略的状况を打開するための突破口となりえよう。しかし、そもそもこの両義的な道具としてのセクシュアリティ自体が権力関係のなかで「産出」されたものであるとするなら、そこにとどまっていたはならない。「セクシュアリティ」そのものを問題として設定すること。これこそ、さらなる一歩であり、この意味で『知への意志』はまさしく、その一歩を踏み出す試みそのものである。

## 真理と生成

それでは最後に、残された問い、すなわち「同性愛者になる」とはどういうことかという問いについて考察することにしよう。一九八一年のある対談のなかに見出されるのは、自らの性の真理を発見しようとしたり、自分は同性愛者であることを認めようとしたりするのではなく、懸命に同性愛者になろうとするべきである、という発言である。同性愛とは、「欲望の一つの形態ではなく、欲望すべき何物かである」、というわけだ<sup>24</sup>。ここにまず含意されているのは、言うまでもなく、「本性」としてのセクシュアリティの拒絶である。

それでは、こうした否定的な意味に加えて、そこに何か積極的な意味を見出すことができるだろうか。「ゲイになること」が「別の肯定へと進むこと」への道を開くことができたら、それはどのようなものになるのだろうか。こうした問いに関して、冒頭に挙げたハルプリンの『聖フーコー』には、一つの回答が示されている。

『知への意志』が実際の解放運動にどのような「効果」をもたらしたかを分析しつつ、ハルプリンは、フーコーによる「戦術的逆転」についての記述に対して以下のように「応答」する。彼によれば、「ホモフォビア言説」によって作り出されるものとしての「同性愛者」とは、「異性愛とは「別の」もの、それと「異なる」ものをすべて包み込むことによって、異性愛の文化的意味を安定させ強固にする機能を果たすような、整合性を欠いた構築物」である。しかしまさしくそうしたいかがわしさゆえに、この「構築物」は、その位置を「客体から主体へ」と移すことによって、自らを肯定する手段として利用できることにもなる。というのも、そうした逆転によって、「新しい種類の性的アイデンティティ、それを定義する明確な内容が欠如しているということによって特徴づけられるようなアイデンティティ」が獲得されることになるからだ。つまり、そうした「本質なきアイデンティティ」をいわば主体的に引き受けることによって、「周縁的な位置取りを肯定し、それに力を与えること」ができる、というわけである<sup>25</sup>。このように、「原理上その正確な範囲とその多様な拡がりをもつては規定できないような可能性の地平」として新たに構成されたものとしてのアイデンティティを、ハルプリンは、「クイアー・アイデンティティ」と名づける<sup>26</sup>。そして彼にとっては、こうしたアイデンティティを手に入れることこそ、フーコーの「同性愛者になる」という言葉の正確な意味に他ならない。「より正確に言うなら、フーコーが言おうとしたのは、我々はクイアーにならねばならない、ということである。フーコーの発言は、彼が言う「同性愛者」を私の定義する「クイアー」——本質なきアイデンティティ、与えられた条件ではなくむしろ可能性の条件、自己変容の機会、奇妙な潜在性——と一致するものとして理解したのでない限り、意味をなさないだろう。なぜなら、厳密に言えば、人は同性愛者になることはできず、同性愛者であるかないかのいずれかであるからだ（強調はハルプリン）<sup>27</sup>。」

「同性愛者」というアイデンティティが「ホモフォビア言説」によって作り出されたものであるという主張、また、「本質なきアイデンティティ」を獲得すべきであるという主張については、検討の余地がまだ残されているかもしれない。これらをただちに、抑圧と被抑圧との二項対立によって権力をとらえることへの回帰とみなしたり、周縁性の名のもとに分散を回収して安らぐことであるとみなしたりするのは、ハルプリンの議論をあまりに単純化しすぎることになるだろう。しかし、最後に引用した箇所、「人は同性愛者になることはできず、同性愛者であるかないかのいずれかである」という言葉は決定的である。というのも、この言葉は、明らかに、権力によってつくられたとされるセクシュアリティを問題化する一方で、もう一つ別のセクシュアリティ、すなわち、自らに固有に帰属するような欲望としてのセクシュアリティを、その出発点に据えているからだ。フーコーは確

かに、セクシュアリティの産出によって個人の行動を攻囲しようとする権力のメカニズムを告発している。しかし、我々の欲望が決定されていること、そしてその欲望によって我々が決定されていることを、我々自ら執拗に認めようとするその態度も、やはりフーコーが絶えず問題化しつづけたものではなかったか。

実際、『知への意志』から八年の後に公刊された『性の歴史』の第二巻『快樂の活用』において、フーコーは、自分がセクシュアリティに関する研究を企図した当初のことを振り返りながら、次のように語っている。「欲望という概念ないし欲望する主体という概念は、当時、一つの理論、とまでは言えないとしても、少なくとも一般的に受容された一つの理論的テーマを構成していた。この受容そのものが、奇妙なものであった。実際、このテーマこそ、セクシュアリティの古典的理論の核心そのものにそのいくつかのヴァリエーションが見出されていたものであると同時に、自らをそうした理論から断ち切ろうとしていた見解のなかにもやはり見出されていたものなのだ<sup>28</sup>。」そして、まさしくこうした「欲望」ないし「欲望の主体」の問題を検討し直すために、彼は、『性の歴史』の研究計画を変更することになる。すなわち、自らを欲望の主体と認めつつその欲望のなかに自らの真理を探索するという任務を、西欧の人間が数世紀にわたって自らに引き受けるようになるのほどのようにしてなのか、と問い直す必要があると考えたからこそ、彼は、十八世紀以降のセクシュアリティをめぐる権力関係の分析から、古代ギリシャ・ローマにおける「自己のテクノロジー」の分析へと向かうことになったのだ<sup>29</sup>。主体をその真理に縛りつけることによって作動する権力についての分析から、自己を解読し自己の真理を明るみに出そうと努める主体についての「系譜学」へ。「隷属化」*assujettissement* の問題から「主体化」*subjectivation* の問題への移行が起こるのである。

ところで、こうした移行の背後、というよりもむしろその手前に、一つの共通の問いを標定することが今や可能であろう。権力関係の問題として考察されるにせよ、自己と自己との関係の問題として考察されるにせよ、根底にあるのは、主体が自らの真理にどのようにして結びつけられることになるのか、という問いである。そしてこれは、権力の軸と主体化の軸においてのみならず、フーコーの研究の第一の軸、すなわち知の軸においてもやはり、その出発点に見出すことのできる問いである。

彼が「考古学」と呼ばれる六〇年代の研究において、フーコーは、西欧近代の思考を、人間主体についてその真理を明るみに出そうという「人間学的」任務に倦むことなく身を委ねるものとして特徴づけようとしている。一九六一年の『狂気の歴史』は、近代の狂気経験の根底に、「人間は、与えられていると同時に隠されている一つの真理を、自らに固有に属するものとして保有する」という公準を見出してそれを告発する<sup>30</sup>。また、十八世紀以来の西欧医学の刷新を扱った一九六三年の『臨床医学の誕生』は、近代医学の成立を分析しつつ、それが個人の真理に接近するための「突破口」としてどのように役立ったかということを示そうとする<sup>31</sup>。そして、一九六六年の『言葉と物』において問われているのは、超越論的主体であると同時に経験的客体であるものとしての「人間」がどのようにして登

場し、それがどのようにして特権的な認識の対象となるのかということである<sup>32</sup>。確かにこれらの研究は、フーコーが「古典主義時代」と呼ぶ十七世紀および十八世紀についても詳細な分析を展開している。しかしそもそもの出発点において問題とされているのはやはり、十九世紀以来成立し、彼自身もかつてそれに囚われとなっていたものとしての、「人間学的」思考である<sup>33</sup>。すなわち、人間主体とその真理との関係をめぐる関心こそが、そうした関係の歴史的成立過程についての考察へとフーコーを導くことになったのだ。そしてやはりこの同じ関心が、七〇年代には権力の軸へ、八〇年代には主体化の軸へと、新たな研究領域への移行を要請することにもなるのである。どのようにして主体が、自己に固有の真理を持つものとして構成され、自己の真理に縛りつけられ、自己の真理の解読に身を委ねるようになったのか。フーコーの著作全体は、このように、主体がどのようにして自らの真理と結びつけられるようになるのかという一つの問いによって貫かれているのだ。

「主体と権力」と題された一九八二年の短いテキストにおいて、フーコーは、「自分たちの前に、数々の行動、数々の反応、そしてさまざまな行動様式が場を占めうるような可能性の領域を持つ」ような主体のことを、「自由な主体」と呼ぶ<sup>34</sup>。これに対して、自らの欲望の真理につなぎとめられたままの主体は、そうした「可能性の領域」を自ら制限する者として現れるであろう。したがって、「同性愛者になる」というフーコーの言葉を、一つの性的欲望によって自らをあらかじめ決定しつつそれを出発点として新たなアイデンティティを求めることとして理解してはならない。彼の言葉には、権力によって課されるセクシュアリティの拒絶とともに、真理としての欲望をあらかじめ想定することの拒絶およびそれを自らの真理として無反省的に受け入れることの拒絶が、明らかに含意されているのだ。そしてそこに何らかのポジティブな意味があるとするなら、それは、「同性愛」を、行動を決定するもののレベルにおいてではなく、徹底して行動そのもののレベルにおいて価値づけ直すことであろう。セクシュアリティの問題を、すでに自らに与えられている欲望の問題としてではなく、これから創造すべき生の問題として、これから発明すべき諸々の快楽の問題としてとらえ直すこと。こうした創造と発明のためにこそ、懸命な努力が求められているのである。

\*

したがってフーコーは、決して性解放運動を否定するのではない。その戦略的有效性と、それによって歴史的にもたらされた実際の効果とを、彼は完全に認めている。それにもかかわらず、彼がそうした運動に参加せず、それに対して一定の距離を取っているとしたり、それは彼が、一つのセクシュアリティを通じてアイデンティファイされることを拒否するとともに、一つの欲望によって行動の可能性があらかじめ決定されることを徹底して拒絶するからだ。私は誰であるかという問いにかえて、我々はいかなる行動をなするか、我々はいかなる快楽を味わうかという問いを提出しつつ、彼は、生の新たな肯定の可能性

を開こうと試みるのである。

そしてここから、「同性愛者として」ないし「ゲイとして」いかに語ればよいかという問題が、フーコー的な地平からいかに遠く隔たった場所にあるかということも理解されるだろう。「誰が語ろうとかまわないではないか」という無関心に表明される倫理を、正当に評価しなければならない。「顔を持たぬために書く」という匿名性への彼の熱意を、決して忘れないようにしなければならないのだ。

## 注

ここで主に使用したフーコーの二つのテキストについては、注において以下のような略号で表す。

VS : Michel Foucault, *La volonté de savoir*, Gallimard, 1976 [『知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、一九八六年]

DE : Michel Foucault, *Dits et écrits*, 4 volumes, Gallimard, 1994 [『ミシェル・フーコー 思考集成』、全十巻、蓮實重彦、渡辺守章監修、筑摩書房、一九九八—二〇〇二年]

---

<sup>1</sup> David M. Halperin, *Saint Foucault*, Oxford University Press, 1995, pp.15-16. [デイヴィッド・M・ハルプリン『聖フーコー』、村山敏勝訳、太田出版、一九九七年、二八—三〇頁]

<sup>2</sup> 「私とフーコーは、ゲイとして、研究者として、知識人として、自分がゲイであることを否定したり括弧にくくったりしないで、語り、人に聞かれ、真剣に受け止めてもらう権威を、どのように獲得し、保つてゆくのか、という問題を共有している」( *Ibid.*, p.8. [一七頁] )。

<sup>3</sup> DE t.4, pp.663, 710. [第十巻、一四六、二二〇頁]

<sup>4</sup> DE t.4, pp.736-737. [第十巻、二五六—二五七頁]

<sup>5</sup> DE t.4, p.163. [第八巻、三七二頁]

<sup>6</sup> DE t.3, pp.260-261. [第六巻、三四八—三五〇頁]

<sup>7</sup> DE t.4, p.736. [第十巻、二五六—二五七頁]

<sup>8</sup> VS, pp.121-122. [一一九—一二一頁]

<sup>9</sup> VS, pp.125-126. [一二三頁]

<sup>10</sup> DE t.4, p.740. [第十巻、二六一—二六二頁]

<sup>11</sup> DE t.3, p.260. [第六巻、三五〇頁]

<sup>12</sup> DE t.4, p.741. [第十巻、二六三頁]

<sup>13</sup> VS, pp.132-135. [一二九—一三一頁]

<sup>14</sup> DE t.4, p.736. [第十巻、二五七頁]

<sup>15</sup> DE t.3, p.261. [第六巻、三五〇頁]

<sup>16</sup> DE t.4, pp.709-710. [第十巻、二二〇頁]

<sup>17</sup> 「私は、セクシュアリティというかくも日常的な概念の前でしばし足を止めようと考えた。この概念に対して一步後退し、その馴染み深い自明性を迂回して、それが結びついている理論的実践的な文脈を分析したいと考えたのである」( Michel Foucault, *L'usage des plaisirs*, Gallimard, 1984, p.9. [『快樂の活用』、田村俣訳、新潮社、一九八六年、九頁] )。なお、『性の歴史』の原題は *Histoire de la sexualité* すなわち「セクシュアリティの歴史」である。

<sup>18</sup> VS, p.59. [五五—五六頁]

<sup>19</sup> VS, p.59. [五五頁]

<sup>20</sup> なお、一九七五年に公刊された『監獄の誕生』においては「非行性」という「本性」を持つ

---

「非行者」の登場が、そして一九七五年のコレージュ・ド・フランス講義『異常者たち』においては「犯罪者」の「犯罪性」ないし「怪物性」の出現が、やはり新たな権力形式の出現との関連のもとで分析されている (Michel Foucault, *Surveiller et punir*, Gallimard, 1975, pp.254-299. [『監獄の誕生』、田村俣訳、新潮社、一九七七年、二七〇—二八九頁]; *Les anormaux*, Gallimard, 1999, pp.75-85. [『異常者たち』、慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇二年、八九—一〇一頁])。

<sup>21</sup> VS, pp.58-60. [五五—五七頁]

<sup>22</sup> VS, p.81. [七九頁]「隷属化」の問題については、DE t.4, p.227 [第九巻、一五—一六頁]も参照。

<sup>23</sup> 「魂」の問題については、*Surveiller et punir*, pp.21-35, 255-258 [二—三四、二四八—二五二頁]を参照。

<sup>24</sup> 「問題は、自分の性の真理そのものを発見することではなく、むしろ、多数的な関係に達するために、これから自らのセクシュアリティを活用することです。そして、おそらくそこに、同性愛が欲望の一つの形態ではなく、欲望すべき何物かである、ということの真の理由があります。したがって私たちは、自分が同性愛者であることを執拗に認めようとするのではなく、懸命に同性愛者になろうとすべきなのです」(DE t.4, p.163. [第八巻、三七二頁])。

<sup>25</sup> *Saint Foucault*, pp.61-62. [『聖フーコー』九一頁]

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.62. [九二頁]

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.79. [一一五—一一六頁]

<sup>28</sup> *L'usage des plaisirs*, Gallimard, p.11. [一一頁]

<sup>29</sup> 「いずれにしても、十八世紀以来のセクシュアリティの経験の形成と発展とを分析するのに、欲望と欲望する主体について歴史的で批判的な仕事を行わないですますのは、困難であると思われた。つまり、一つの「系譜学」が必要であると思われたのだ。これは、欲望や色欲やリビドーについてどのような考え方が相次いで現れたかということに関する歴史を書こうとすることではない。そうではなくて、それによって個人が自らに注意を払い、自らを解読し、自らを欲望の主体として認めてそれを告白することになるような実践を分析しようとするのである。それによって個人が、ある種の間を自己と自己とのあいだにはたかせ、自らの存在の真理、自然なもしくは失墜した存在の真理を、欲望のなかに発見することになるような、そうした実践を分析することなのだ」(*Ibid.*, pp.11-12. [一一—一二頁])。

<sup>30</sup> Michel Foucault, *Histoire de la folie*, Gallimard, p.549. [『狂気の歴史』、田村俣訳、新潮社、一九七五年、五五一頁]

<sup>31</sup> Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, P.U.F., 1963, p.199. [『臨床医学の誕生』、神谷美恵子訳、みすず書房、一九六九年、二六七頁]

<sup>32</sup> Michel Foucault, *Les Mots et les Choses*, Gallimard, 1966, pp.314-398. [『言葉と物』、渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、一九七四年、三二二—四〇九頁]

<sup>33</sup> 五〇年代のフーコーのテキストには、「人間学的」思考の名残がまだまだ色濃く刻まれている。

<sup>34</sup> DE t.4, p.238. [第九巻、二六頁]